

私が髪を伸ばすまで

瑞穂国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

まだウォースパイトの髪が短かった頃――

イギリスが慕った艦娘と、彼女に憧れたウォースパイトの、短いお話。

※作者は四年前からウォームフード妄想に侵されたやばい奴です。この度その妄想がついに爆発したのでここに置きます。

ウォー様はフード様の右腕であってほしいの…

目次

私が髪を伸ばすまで	1
彼女が髪を伸ばしたなら	6

私が髪を伸ばすまで

彼女の髪を梳かすのが、私の日課だった。

朝、艦隊の誰よりも早く起きて、自分の身支度を済ませ、彼女の部屋を訪れる。いまだ微睡みの中にいる彼女を起こして、他愛のない会話とともに彼女の髪を梳かす。それが、私——ウォースパイトにとっては、掛け替えのない日常だった。

彼女は、羨ましいぐらいに優美な金髪をしていた。生糸のような髪はしなやかで、手触りも櫛通りも心地よい。風を孕めば、天翔ける翼の如く。雨が滴れば、水面に遊ぶ湖の精ウィウィアンの様。そして陽の光を受ければ、輝きたゆたう海のように。誰もが見惚れるその金髪を、彼女は腰近くまで伸ばし、なびかせていた。

その髪に触れる栄誉を、私は彼女から授かっていたのだ。

彼女は、その名をフツドといった。イギリス戦艦——いいえ、イギリス軍艦の名を問えば、百人中百人が彼女の名前を上げる。勇壮にして優美。華麗にして果敢。最も美しい軍艦、工学美の頂点、海上宮殿の名を欲しいままにする、イギリス海軍随一の戦艦、その艦娘。それが彼女。

その名に違わぬ——あるいはそうあろうとしたのか——と言うべきか、彼女という艦娘も、イギリス海軍随一の艦娘だった。見目麗しく情けあり。端麗な容姿と、柔らかな物腰、挫けぬ心情。淑女の心得、紳士の嗜み、騎士の誓い、全てを欠けることなく、違和感なく、内在させる。皮肉屋の国民が、彼女にだけは諸手を挙げて降参した。ありとあらゆる者が——民も、王室も、そして艦娘も、彼女を慕い、憧れ、称賛して止まなかった。

そんな彼女の、唯一の——私以外の誰も知らない、弱点。それが朝だった。

「ウォースパイト。朝、私を起こしていただけないかしら」

建造されて間もないころ、たまたま隣室だった私に、彼女がそう声を掛けて来たのが、始まりだった。以来、私は朝になると彼女の寝室を訪れるようになった。いつの間になら、そこへ髪を梳かすことが加

わった。

本国艦隊旗艦である彼女の副官となっても、この日課が変わることはなかった。いいえむしろ、より大手を振って、彼女の寢室を訪れることができるようになった。

「フツド様の御髪は、本当にお美しいですね」

それが私の口癖だと、彼女は笑って指摘した。櫛を入れる度、手で触れる度、私はそう呟くのだという。自覚なく発露していた本音を、私は赤面して認めるしかなかった。それほどまでに、彼女の髪は美しく、魅力的だった。

「ありがとう。貴女の髪も綺麗よ、ウォースパイト。伸ばしてみたら素敵なのに」

彼女が触れる私の髪は、同じ金髪でも、彼女のものとは程遠かった。櫛通りが悪いから、少しでも手入れしやすいようにと、短くしている。肩口で揃った毛先は、それでもしなやかとは言い難い。華やかさとは縁遠い。何度も伸ばそうとして、でも結局、私は断念し続けていた。「伸ばしたいのなら、一度試してみなさいな。ただ諦めるなんて、もったいないわ」

そう言って毛先に触れる彼女の手がくすぐったかった。彼女は、「髪を伸ばしたら、その時は似合いのドレスを一着、プレゼントしましょう」と約束してくれた。

ドレスに釣られたわけではないけれど。ある日思い立ち、私は今度こそ、髪を伸ばす決心をした。彼女には及ばなくとも、彼女と同じように、してみたかった。やはりどうしたって、彼女は私の憧れだった。「髪、伸ばしているの?」

真つ先に彼女が気づいてくれた時は、心臓が早鐘を打つほどに嬉しかった。相も変わらず、はつきりと口にするのはむず痒く、歯がゆく、照れくさくて、私は伸びかけの毛先をいじり、頷くのがやっとだった。そんな私の内心を知っているように、彼女は柔く微笑んだ。金の睫毛に太陽を宿し、笑っていた。

「約束通り、ドレスを見繕わなくては、ね」

美しいウイנקを一つ決めて、彼女は泊地を出立した。その日は、

彼女の出撃の日だった。

高鳴る胸を押さえて、彼女たちを見送った。風に揺られる自分の髪が、無性にこそばゆかった。

その日、彼女は帰ってこなかった。

深海棲艦戦艦部隊と死闘を演じた彼女直属の艦隊は、多くの艦が傷つき帰投した。その中に彼女の艦影はなかった。欧州最大を誇った巨躯も、勇猛の象徴たる主砲も、尖塔の如くそびえる艦橋も——軍艦美の極致と称された彼女の艦は、待てど暮らせど、泊地には現れなかった。

「ごめん、なさい……っ！フツド様は……フツド、様は……っ」

滝のように涙を流す煤汚れた顔が、私に全てを理解させた。

彼女はもう、帰ってこない。人々が慕った戦艦は、艦娘が憧れた淑女は、イギリスが恋したあの人は——私の愛した彼女は、その身を海へ還したのだ。

私は、いつも彼女がそうしていたように、目の前で泣きじやくる少女の背をさすり、その嗚咽に寄り添い、「大丈夫よ。よく、頑張ったわね」と声を掛け続けた。

不思議と涙は出てこなかった。こんな日を覚悟していた、わけではなかった。頭は悲愴と悔恨で埋め尽くされ、心臓は潰れるほどに痛かった。それでも、感情と痛みを吐き出す涙が、こぼれなかった。あるいは目の前の少女が、私の流すはずの涙をも、流しているのではと思った。

彼女の死を、イギリス中が悼んだ。国王陛下は多くの国民に慕われた彼女へ哀悼の意を捧げ、一月の間喪ひとつきに服すと言われた。遺体すら残らなかった彼女の国葬は、多くの人に囲まれながらもどこか虚ろなものに、私には思えた。

無情にも、深海棲艦との戦争は続いていた。彼女という屋台骨を失った海軍は、そして艦娘たちは、この先も戦うために、新しい旗艦を待ち望んでいた。誰かが彼女たちを率い、まとめ上げなければならなかった。

喪服の私のもとに、新たな旗艦の辞令が届いた。彼女の代わりを務

めると、海軍は私にそう命じた。けれど、どうしても首を縦には振れなかった。彼女の代わりなどどこにもいない。まして私が、務められるものではない。だから、私は三度、その辞令を断った。提督がただ静かに辞令を破いてくれたことが、ありがたかった。

国を挙げての喪が明ける頃、私のもとに仕立て屋の主人がやって来た。彼女が懇意にしていた店で、私も顔見知りだ。彼は丁寧に弔意を示し、それから預かり物があると口にした。私宛だというその預かり物に、心当たりはなかった。

洋服を入れる箱に、差出人の名前はなかった。私は恐る恐る、箱を開いた。

中には、いつも通りに美しく仕立てられた洋服。それから——一枚の、たった一枚の、メモ書きのような、紙。

「Dear my fair lady」

彼女の字だと、一目でわかった。流れるような筆跡、美しくも確かな線。サインをする時、レポートを記す時、手紙を書く時、幾度となく目にしてきた字だった。間違えるはずが、なかった。

夢遊病のような心地で、箱の中から洋服を取り出した。出てきたのは、一着のドレス。舞踏会で身に着けるような、飾った、絢爛なものではなかった。普段から着れるような、カジュアルでシック、動きやすさとデザインを両立したドレス。

——「髪を伸ばしたら、その時は似合いのドレスを一着、プレゼントしましょう」

彼女の言葉が蘇った。それが、もう随分と前の記憶に感じられた。

「フツド様は、大変熱心に、選んでおられました」

一言残して、主人は部屋を立ち去った。扉が閉まった瞬間、ぽつり、雨が手に落ちた。

ぽつり。ぽつり。雪が滴った。熱いものが頬を伝うたび、雨脚が強くなった。寒いわけではないのに、いいえむしろ体が燃えるほどに熱いのに、震えが止まらなかった。

ぼろぼろと何かが零れ落ちた。抱え続けたものが、崩れて溶けていった。無くしたくない、手放したくないと意地を張ったものが、手

の内から消えていった。

そうして、この手には、彼女に送られたドレスのみが、残った。

あの時にはもう、彼女はドレスを選んでいたので。

たった四単語の、手紙にすらならない、彼女の言葉。彼女が残してくれた、私のための、ドレス。

——「大丈夫よ。よく、頑張ったわね」

どこからか、彼女の声が聞こえた気がした。

今日、私は戴冠の日を迎える。旗艦の任を拝命した私へ、国王陛下が王冠と王笏、宝珠を授けてくださる。それらは、旗艦の象徴となる、儀礼用の器物だ。

彼女の選んだドレスに身を包み、マントを羽織って、国王陛下の前に跪く。伸ばしかけで、肩にかかる程度の私の髪に、そつと冠が乗せられた。右手には王笏、左手には宝珠。いずれも、元は彼女の持ち物だった。

私は今、それを——祖国を、民を、艦娘を、勝利を、未来を、彼女より託されたのだ。

国王陛下に促され、私は集まる群衆へ向き直る。老若男女。あらゆる国民が、あらゆる艦娘が、国中の目が、私へと注がれていた。

……ああ、彼女も、こんな心持ちだったのだろうか。

「我が名はウォースパイト。今この時より、誉れ高き大英帝国艦隊を、偉大なる祖国を、勝利へと導かん」

「大英帝国万歳！」「ウォースパイト様に栄光あれ！」その声とともに、割れんばかりの喝采が、ブリテン島に響いた。

一陣の風が、髪を通り抜けていく。沸き立つ群衆の中に、ふと、彼女の微笑みを見た気がした。

彼女が髪を伸ばしたなら

巡洋戦艦フツドの撃沈は、大英帝国に深い悲しみをもたらした。

深海棲艦の戦艦部隊と会敵したフツドと彼女隷下の艦隊は、死闘の末にこれを撃滅したものの深く傷ついた。最後まで戦場に留まって殿を務めたフツドは、多くの艦の無事を見届けた後、その身を海に還したという。

多くの者が——国民も、軍人も、艦娘も、王室も、誰も彼もが慕う艦娘だった。イギリスという国そのものが、フツドという船に、その艦娘に、恋をしていたと言ってもいい。それ故に、彼女を失ったという悲壮感は深く、大きく、決して簡単に癒えるものではなかった。国を挙げての葬儀には多くの者が列席し、首を垂れ、その死を悼んでいた。

かくいう私もフツドの死を悼んだ一人だった。

女性士官というのが珍しかったのか、フツドにはよく目をかけられていた。彼女主催のお茶会へ誘われたことも一度や二度ではない。顔を合わせれば微笑み、他愛もない会話に付き合ってくれる彼女を、勝手ながら、友人とも、そして優しい姉とも思い、慕っていた。それ故に、親しい者がこの世を去ったという事実は筆舌に尽くし難い痛みで、まさしく身を切り裂かれるような思いであった。太陽も羨む美しい金髪をなびかせ、暖かで包み込むような微笑みをもう二度と目にすることはないのかと思うと、涙が零れて仕方がなかった。

しかしながら。フツドの死を悼む以上に気掛かりなこともまた、同時に私にはあったのだ。

国中が悲しみに暮れ、涙を流す中にあっても、決して泣かない人がいた。誰よりもフツドを慕い、愛した人——誰よりもフツドに慕われ、愛された人。そんな彼女が悲しくないわけはなく、しかしフツドが沈んだあの日から、ただの一滴も涙を見せない友人のことが、私はとにかく気掛かりでならなかった。

彼女は、名前をウォースパイトといった。本国艦隊旗艦であったフツドの副官を務める戦艦娘で、公私ともにフツドを支えていた艦娘

であった。フツドにも劣らない金糸の髪を、細い肩のすぐ上で揺らす艦娘だった。

私とウォースパイトの付き合いはそれなりに長かった。何がきっかけだったかは、今となってはよく覚えていないが、とにかく何かと話が合つて、よくお茶をした。私をフツドに紹介したのも彼女だった。

ウォースパイトがフツドを——その逆もまた然りで——慕っていたことは、端から見ても明らかだった。それが、いわゆる恋慕というものなのか、あるいは単に憧憬なのかはわからなかったが、二人はそれは仲の睦ましい様子だった。

だからこそ、フツドが沈んだという報告を受けた時、私が真っ先に駆けつけたのは、その友人の元であった。麗しの艦隊旗艦を誰よりも強く慕っていた、ウォースパイトの元であった。

ウォースパイトは、それはそれはとても気丈に振舞っていた。いいえ——気丈に振舞っているのだと、私はそう思った。深く傷つき、命からがら戻ってきたフツド直属の艦娘たちを労い、見舞い、慰め、励まし、毎日のように世話を焼いていた。「大丈夫よ。よく、頑張ったわね」と、どこかで聞いたような言葉をかけ続けていた。その瞳に涙は欠片すらも浮かんでいなかった。

ただ、ぱたりと、私へのお茶会の誘いだけが無くなった。暇を見つけては毎日のように声をかけてきた彼女が、自室に閉じこもって一切私に顔を合わせてくれなくなった。扉をノックしても、決して返事をしてくれなくなった。胸騒ぎは日に日に大きくなっていった。

ようやく彼女と面と向かつて会えたのは、本国艦隊提督に付き添って彼女の部屋を訪れた時だった。国王陛下が宣言された、フツドの喪に服す一か月も、まもなく明けようという頃だった。

深海棲艦との戦争が無情にも続く中、フツドという大きな屋台骨を失った海軍は、艦娘たちの心の支えとなる次なる旗艦を待ち望んでいた。その大任を任せる艦として、ウォースパイトに白羽の矢が立ったのだ。

その辞令を伝えるために、本国艦隊提督と私は彼女の部屋を訪れ

た。提督が私を付き添いに選んだのは、親しい私がいればウォースパイトも気が楽になると思つてのことだろう。

どんな理由であれ、久しぶりに友人の顔を窺えた私は、ただただ安堵の息を吐くばかりだった。ウォースパイトは、肩口で揃えていた髪がやや伸びている以外、これといつて変わった様子もなかった。それがただ、無性に嬉しかった。

しかし、肝心の本国艦隊旗艦の方は、断られてしまった。「フツド様の替わりなど、私には到底務まりません」の一点張りだった。エメラルドのように美しかった彼女の瞳はずっと伏したままで、最後まで私を捉えてくれることはなく、私の淹れた紅茶の液面を、言いようのない冷淡さで見つめていた。

同じことをさらに二度繰り返した。ウォースパイトは決して首を縦に振ることはなく、その度に提督は、辞令の紙を破り捨てた。彼も無理強いはしたくないのだと、私は思った。

ウォースパイトの髪は、少しずつ伸びていった。

四度目の辞令がウォースパイトに届けられるより前に、私は東洋艦隊への転属を命じられた。階級昇進とセットで、本格的な艦隊指揮権を与えられるものであった。しかし、喜びは微塵もなかった。少しでもウォースパイトの近くにいたかった。離れたくはなかったし、離れてはいけないような気すらしていた。嫌な予感を毎夜夢に見た。

そんな折、珍しく——そう思つてしまうほど久方ぶりに、ウォースパイトからお茶会の誘いがあった。気乗りせず、遅々として進まない転属支度を一も二もなく切り上げて、私は彼女の部屋を訪ねた。

エメラルドの瞳を見たのは、本当に久しぶりのことだった。いつものようにお茶をした。他愛もない会話を始める前に、少しばかり近況報告をした。この日のために温めたとつておきのジョークに、ウォースパイトは笑ってくれた。

もう、取り繕ったような気丈さは、感じられなかった。必死に封じ込めた何かを、取りこぼすまいとしていたものを、全て流しきったように。強く美しい私の友人、ウォースパイトが、そこにはいるのだと

思えた。

「本国艦隊旗艦のお話を、受けようと思うの」

二杯目の紅茶を注ぎながら、ウォースパイトは何気ない風に言った。並々ならぬ決意があったはずなのに、その言葉はとても軽やかな調べで、そよ風のような涼やかさとともに私に全てを納得させた。

何があったのかを、改めて尋ねることはしなかった。ウォースパイトは、ようやく、フツドの死と向き合ったのだ。

「ウォースパイトなら、きつと立派な旗艦になるよ。私が保証する」

私がそう言うと、彼女は「ありがとう」と微笑んだ。きらりと光った瞳が、ほんの一瞬、ここではない遥か遠くを見つめた。

いつの間にもやら、彼女の頬を涙が伝っていた。

「ごめんなさい。あなたに会えば、きつと、泣いてしまうと思ったの」扉を開かなかった理由を、ウォースパイトはそう告白した。きつと彼女は、心のどこかで泣くことを拒んでいた。泣いてしまえば、大切な人の永遠の不在を、否応なく認めてしまうから。

「……うん。うん。わかってるよ。でも、私はウォースパイトに、泣いてほしかった」

膨らみ続ける悲しみに蓋をすれば、いつか自らの身が弾けてしまう。抱えきれないものを涙に溶かして流さなければ、それはいつか溢れて心を壊してしまう。友人にそうはなつてほしくなかった。

「……ええ、そうよね。私、泣いてよかったのよね」

ウォースパイトはぼろぼろと雫を零し続けた。けれど同時に、とても穏やかに、柔らかに、微笑んでいた。肩に触れる髪を揺らして、泣きながら、笑っていた。

その日以来、私が本国を出立するまでの一週間、私たちは毎日お茶会を開いた。他愛もない、取るに足らない、いつも通りの会話に笑い合った。

フツドの話も、たくさんたくさん、した。私たちの自慢の、素敵な友人フツドの話を、たくさんたくさん。

紅茶だけが映す私たちのささやかな日常に、フツドの微笑みも混じっていたような気がした。

新たな本国艦隊旗艦の就任を報せる記事が、二日遅れの新聞の一面を飾っていた。「ウォースパイト様、戴冠の儀」と大きく踊る題字、就任を祝福する記事、大歓声を送る民衆の写真。それらに囲まれるウォースパイトは、艦隊旗艦の証である三種の器物——王冠、王笏、宝珠を国王陛下より授かり、儀礼用のマントをはためかせて、凜とした表情で立っていた。

「我が名はウォースパイト。今この時より、誉れ高き大英帝国艦隊を、偉大なる祖国を、勝利へと導かん」

彼女の言葉にブリテン中が喝采を上げたと、興奮気味な記事が語っている。隅から隅まで第一面を読んだ私は、ようやく新聞を開いて中身に目を通す。

とはいっても、その日の新聞は内容の大半が新旗艦に関することばかりで、紙をめくってもめくってもウォースパイトの写真が載っていた。嬉しいような、むず痒いような、不可思議な感覚を抱きながら苦笑して、私は紙面をめくっていった。

ふと、一つの記事が——記事の横に貼られた写真が、目に留まった。「ウォースパイト様の新しいドレス」と見出しが打たれた通り、写真に写る彼女は、私がよく見慣れたドレスとは違うものを着て、執務にあたった。

豪華な装飾などはない。凝った刺繍も見受けられない。胸元に咲いた薔薇だけがアクセントで、非常に落ち着いた、シックなデザインドレス。しかし不思議と目を引いた。ウォースパイトの雰囲気にはとてもよく似合っていて、彼女の温和な性格を物語っているようだった。

私には——世界中で私にだけは、そのドレスに見覚えがあった。フツドが沈む一週間ほど前のことだ。その日は珍しく、ウォースパイト抜きで、私とフツドだけでお茶会をしていた。その日フツドは、彼女の鼻唄にしていた仕立て屋の主人を呼んでいた。主人の持ち出した写真を、フツドは食い入るように、それは熱心に見つめていた。

——「ウォースパイトがね、最近、髪を伸ばしているようなの」

フツドはそう言って笑っていた。髪を短くしていたウォースパイ
トに、彼女は日頃から「伸ばしたらいいのに」と言っていた。

——「髪を伸ばしたら、ドレスを贈る約束をしているのよ」

ウォースパイトにはまだ内緒、ね。片目を瞑り、唇に人差し指を押
し当てて、彼女は私に秘密の共有を頼んだ。フツドは一つのドレスの
デザインを気に入ったらしく、それから細かに主人へ注文をつけてい
た。オーダーメイドのドレスは、仕上がりまで一か月ほど——丁度、
私が転属の辞令を受け取った頃までかかるという話だった。

……あの日見たドレスを、写真の中のウォースパイトが着ている。

『——新しいドレスについて、ウォースパイト新旗艦は大切な人から
の贈り物であるとお答えになったが、それ以上は微笑みにてはぐらか
されてしまった。ドレスを送った「大切な人」が一体何者か気になる
ところではあるが、筆者にはこれ以上大英帝国海軍の秘密へ切り込む
度胸はないので、真相は読者諸君のご想像に委ねたい』

真新しいドレスに身を包み微笑むウォースパイトの写真の横で、記
事はそう締めくくられていた。ゴシップ好きを煽るような文面に、今
日ばかりは強く心を揺さぶられている。

「そっか……そうだったんですね、フツド」

流しきったと思っていた涙が、ひとしずく、紙面に零れ落ちた。カ
メラマンへ微笑を向けるウォースパイトの、頬の上に涙が落ちる。

フツドがウォースパイトを救ったのだ。フツドの残したドレスが、
ウォースパイトに涙を流す覚悟を与えたのだ。

「ありがとう……大丈夫だよ、私たちは」

滲んだ視界に、優しく微笑むフツドの姿を見た気がした。

新聞を畳んだ私は、自室を出て海を目指す。東洋艦隊の本拠地、シ
ンガポールの潮風を、胸一杯に吸い込む。それから、海軍に入っ
て来ずつと、短く切り揃えていた髪の毛先に触れた。

……どうだろう。私も、髪を伸ばしてみようか。